

## 教室で迎える

カウンセリングの研修では、相談室などでカウンセラー（相談担当教師など）がクライアアント（子どもや相談者）を待つことは常識だと教えられました。カウンセラーは面談時間よりかなり早めに相談室に行き、空気を入れ替えたり、室内を清掃したり、個人情報にかかわる書類が見えるところに出ていないかなどに配慮します。

さらに、研修では、子どもや相談者が入室したときにどう対応するかの練習もしました。そのときの強烈な記憶があります。ロールプレイでした。私のパートナーは、たまたまその日の指導者でした。設定状況は簡単です。「相談係の私が部屋で待っている。外から生徒役がノックをする。それを迎え入れて、面談用の椅子に着席させる」というものです。ほんの三〇秒くらいで終了するロールプレイです。私は生徒役の指導者に対して、

「やあ、こんにちは。中に入ってください」

「じゃ、その椅子に掛けてください」

と発言して、生徒役の彼が着席して終了です。そして振り返り。生徒役の指導者が感じたことや気づいたことを話します。

「そこで言われたのは、「小林さん、怖いですよ」、でした。これにはびっくり。にこやかに迎えたつもりでした。」

「え、どっが？」

「うーん、うまく言えないんですが、小林さんの動きですね……。声も表情もにこやかですけど、何というか、手の動かし方と、身体の動き方にドキッとさせられました」

当時の私はまだ大学空手部の監督でした。試合もまだやっていました。空手部の主将クラスと試合をしても負けたことはありませんでした。そんな武道家としての身についた動作が威圧的だったのかもしれませんが。三〇年ほど経った今でも忘れられない出来事です。

こんな経験から学んだことをもとに、私は高校の物理の授業では生徒たちを物理室で迎えることにしました。まず、授業の前の休み時間が始まったときには物理室にいるようにしました。プリントやリフレクションカードなどを入り口の前後のテーブルに並べたり、物理室の片付けをしたりします。模造紙の落書きのチェックをします。めったにありませんでしたが、卑猥な内容や個人を誹謗するような落書きは消します。「生徒を迎える」ということは、「安全安心の場」をつくる第一歩だと理解していました。

このことは生徒たちにはたぶん好評だったと理解しています。「たぶん」というのは、このことについて生徒がリフレクションカードに書いてくることも少なく、会話の中でもほとんどありませんでした。それでも、一年間に一回か二回、「先生が私たちのために準備を待っていてくれるのがうれしい」というリフレクションカードがありました。一人が書いてくることは、その何倍かの生徒が感じていることだろうと勝手に解釈していました。

## 初回面談の目標は、次回の約束をとる

「次の授業が楽しみだ」と感じさせて終わる

カウンセリング研修では、初回面談の狙いは「次回の面談の約束をとることが最大の目標」と教えてもらいました。私は、このことも、とても大事な考え方だと思います。

学校の授業においても、同様のことが言えるのではないのでしょうか。以前の幼稚園教育要領の「ねらい」の「内容」には「(子どもたちが)喜んで登園し、先生や友達に親しむ」と書いてありました。

「物理室だからできること」と言われたこともありますが、これは普通教室でも応用できます。越ヶ谷高校にいたころにもたまに普通教室に行くことがありました。そのときも始業のチャイムが鳴る五〜六分前には教室に入りました。そうすると生徒はびつくりします。

「え、もう授業？」

「いえいえ、まだです。ゆっくりしててください」

とこんな感じなのですが、利点はたくさんありました。休み時間中の生徒の様子を観察できる、雑談ができる、生徒が授業準備を早めに始めるのでチャイムとともに解説を始めることができる等々です。お試しください。